一八二〇年代チアンジュール-レヘント統治地域の開拓

― コーヒー生産を目的としない開拓 ―

大橋厚子

はじめに

日本におけるジャワ島の土地制度史研究は、一九七〇年代に数人の研究者によって着手され進展をみた。その一人が森弘之氏であったが、森氏の学風は特徴のあるものであった。氏は眼前の世界情勢、および研究者のよってたつ立場の政治性に鋭い意識を持たれたが、一九、二〇世紀ジャワの土地制度の変遷に対しても、土地所有形態の性格規定に勢力を注がれるよりは、土地制度に対するオランダ支配の影響に注意を払われる方であった。近年文化人類学者によって、オランダ植民地権力の諸政策がインドネシア各地の地方文化の改変までも企て、一定の成果を上げていたことが明らかにされてみると、[1]森氏の問題意識の先駆性にあらためて驚かされる。

本稿は、この森氏の関心に触発された筆者の、近世プリアンガン地方史研究の一端である。より具体的には、一九九四年にホードレイ(Hoadley 1994)が提出した、一八世紀プリアンガン地方における封建的生産様式成立説 ― 現地人支配層が水田とコーヒー園を開発・所有し、これを経済外強制によって住民に耕作させ、地代として米とコーヒーを得る ― を、実証をもって批判すると共に、植民地支配のメカニズムの一端を明らかにするものである。

I　史料と分析方法

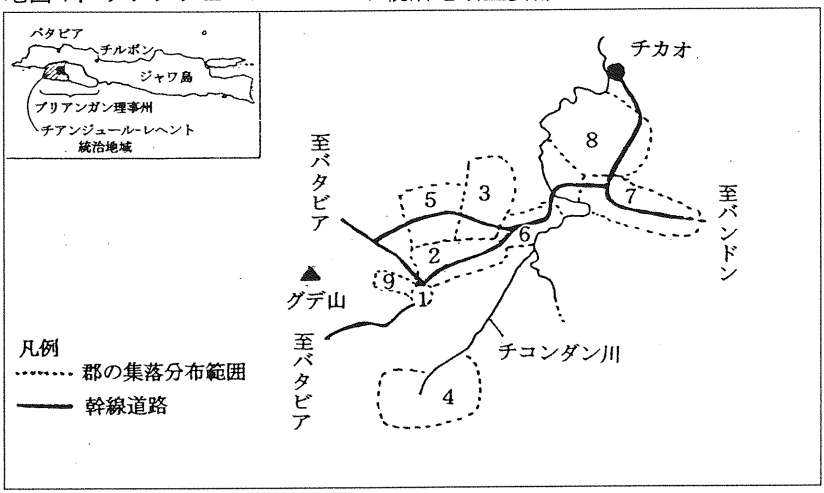
本稿では、一八二〇年代後半のチアンジュール-レヘント統治地域(Tjanjor Rgentschap：綴は原史料のまま)に属する二五郡(district)のうち、ヌグリ-チアンジュール(Negorij Tjanjor)、チブラゴン(Tjiblagong)、チカロン(Tjikalong)、チコンダン(Tjikondang)、マジャラヤ(Madjalaja)、マ

ンデ(Mande)、ガンダソリ(Gandasoli)、チヌサ(Tjinoesa)、そしてバヤバン（Bayabang）の九郡を考察する。

利用する主な史料はこのレヘント統治地域全域を初めて網羅した人口統計である「一八二七年チアンジュール-レヘント統治地域の人口統計(Bevolking van het Regentschap Tjanjor in December 1827)」(以下、「人口統計」と略す)と二〇世紀初めに測量された五万分の一の地図（参謀本部陸地調査部　一九四三：以下、五万図と略す）である。「人口統計」掲載集落の所在を五万図によって確認し、集落名、集落の規模・分布形態、集落分布地域の地形・灌漑工事跡、さらに集落内の労役可能男女の比率・一戸(huishezin)あたりの労役可能男子数などを検討する。そしてこれに断片的な記述史料および筆者の景観観察から得られた情報を加える。以上の指標やデータは、開拓状況を示す根拠として単独では薄弱であるが、複数の指標における考察結果が同一の傾向を示すならば、判断の蓋然性は高まろう。なお「人口統計」をはじめとする一八二〇年代の統計の数値については、本稿では絶対値として扱わず、本稿対象九郡の、チアンジュール-レヘント統治地域内での相対的位置を示す目安として使用する。史料批判については、一九九六年拙稿を参照いただきたい。

郡毎の分析に先立ち、上述のような作業から帰納的に得

地図１．チアンジュール-レヘント統治地域主要部



1　ヌグリ-チアンジュール郡　　2　チブラゴン郡　　3　チカロン郡
4　チコンダン郡　　5　マジャラヤ郡　　6　マンデ郡
7　ガンダソリ郡　　8　チヌサ郡　　9　バヤバン郡

られた開拓地に見られる集落分布、集落人口のパターンを略述する。

第一に集落分布形態について、チアンジュール-レヘント統治地域では灌漑用水に恵まれかつ開拓が比較的古い一帯には、人口一〇〇～三〇〇人の集落が多く見られるが、従来灌漑用水に恵まれず大規模灌漑工事によって急速に開拓された一帯には、しばしば次の二つの形態の集落分布が見られた。ひとつは、この地方の通常の集落規模を遥かに越える集落（三五〇人以上）が比較的規模の大きい灌漑施設の周辺に単独あるいは二、三存在する形態であり、今一つは、相対的に大きな人口を擁する一集落の周辺に小集落が衛星のごとくに散在する中心-衛星型の分布形態である。プリアンガン地方では大集落には郡内の下級首長が居住していると考えられるので（大橋　一九九五、三六-四二）、これらの形態では下級首長が配下の住民と共に入植地に居住し、後者の場合では周囲の小集落を統括していたことが窺われる。

第二に労役可能女子に対する男子の比率をみると、ジャワ島の人口統計では一九世紀初めから植民地期末期に至るまで女性が多くカウントされており、これは一般に、賦役貢納、徴税を免れるためであったと考えられている。本稿対象九郡の中でも郡の平均値より労役可能男子がより多い地区と、労役可能女子がより多い地区とが存在するが、これまでの作業からは、男性の多い地区は交通の拠点、あるいは新しい開拓地を示す指標が多くみられ、記述史料からも新たに水田を開くため最初に移住する者は、主に単身の男であったことがわかる（大橋　一九八九、一二〇-一二一）。その一方で、女子が平均比率よりかなり高い地区は、比較的早期から徐々に開拓され本稿対象期には安定した水田地帯であったことを示す指標が多く見られる。この場合賦役貢納を逃れるために労役可能男子数を偽っているか、賦役貢納の負担が重く実際に労役可能男子がに逃亡していることが考えられる。

第三に一戸あたりの労役可能男子数をみると、戸数より労役可能男子が少ない集落は比較的規模の小さい集落の場合が多く、また一九九八年拙稿では、灌漑工事が失敗に帰した地区、開拓条件のあまり良くない一帯および幹線道路付近にしばしば存在した（大橋　一九九八、第二章）。このことは本稿でも同様であった。そこで農業基盤の不安定あるいは過重な賦役貢納の負担による生活の不安定が、労役可能男子の逃亡あるいは過少申告に結果したことが推測される。これに対して一戸あたりの労役可能男子が一・七あるいは二人以上の集落が多く分布する地区について、本稿対象地域では他の傾向との相関関係が明瞭とならなかった。

おそらくこの指標はコーヒー生産と関わりを持つものと考えられる。

以上、述べてきた各指標の数値に見られる傾向は、これら一つ一つでは別の解釈も可能である。しかし開拓に関わる幾つかの指標と組み合わせるならば、開拓状況を示す補助資料として利用可能であろう。さらに本稿の結論を含めたこれまでの筆者の主張は作業仮説にすぎず、少なくともより詳細な史料およびフィールドでの観察と聞き取りによって検証されるべきことは言うまでもない。

Ⅱ　米穀生産を期待される郡

1　概況

本章で扱う郡は、ヌグリ-チアンジュール、チブラゴン、チカロン、チコンダンの四郡である。前三郡の名称は、一八世紀初めから半ばまでのオランダ植民地文書にはレヘント統治地域の名称として現れた。しかしその後チカロン、チブラゴンはそれぞれ一七八八、一七八九年にチアンジュール-レヘント統治地域の一郡に降格された。そして一八一二年までには集落チアンジュール周辺も、レヘントとプリアンガン理事州のヨーロッパ人理事官（resident）とが居住する同理事州の統治の中心のまま、ヌグリ-チアンジュールという名の郡として扱われるようになった。これら三郡は、経済面では一九世紀に入ると植民地権力から米穀生産を最も期待されることになった。一八〇五年にオランダ植民地権力はレヘント直轄地でのコーヒー労役の軽減を決定し、チアンジュールではその廃止が確認された（大橋　一九八九、一一八；Haan 1910-12：vol. 4 429）。さらに一八二〇年代末の統計を比較検討すると、コーヒー供出予定量はヌグリ-チアンジュールは零、チブラゴン八〇〇ピコル（pikol：約六〇kg）、チカロン七〇〇ピコルで、コーヒー生産を期待される郡の二分の一以下であり、その順位も、チアンジュールに属す二五郡からインド洋側辺境の五郡を除いた二〇郡のなかで、それぞれ最下位、一三位、一五位であった。その一方、貢納負担者の米穀総生産量は、それぞれ二位、三位、八位、さらに貢納負担者の米穀生産総量を人口で割った値がそれぞれ五位、四位、二位であり、余剰米の存在が窺われる（大橋　一九九六、六-一一）

これに対してチコンダンは、一八〇〇年頃よりチアンジュール-レヘント統治地域に属す郡として名称が登場し、一八二〇年代末の統計類からは、米穀生産を期待される郡と辺境郡の中間の性格を持つことがわかる。すなわちコーヒー供出予定量は七〇〇ピコルでチカロンと同様であるが、水田化率が八〇％とやや低いほか、米穀貢納者の米穀生産総量

を人口で割った値が前三郡の半分弱であった。さらに西隣のペッセール郡と同じ郡長をいただいていることから、本郡はおそらくインテンシブなコーヒー生産を期待されているペッセール郡への労働力の供給が期待されていたと考えられる（大橋　一九九六、六-一一）。

2　ヌグリ-チアンジュール

ヌグリ-チアンジュール郡は、既に述べたようにプリアンガン理事州州都および、チアンジュール-レヘント統治地域のレヘント居住集落（以下、首邑と呼ぶ）を含む郡であるが、「人口統計」掲載二五集落のうち、所在が判明したのは九集落のみであった。所在判明集落が極めて少ない理由は、一八二〇年代末の集落の多くが、五万図に広がるチアンジュール市街地にのみ込まれてしまったためと考えられる。しかし一九九八年拙稿ですでに検討した隣接諸郡の集落分布範囲から（大橋　一九九八、七九）、本郡は、隣接諸郡との集落混在を考慮しても、グデ山のなだらかな山裾と盆地底部の境目（標高四二三m）を中心とする半径一～一・五km程の小規模な郡であったといえる（地図2参照）。五万図ではこの範囲に市街地と周囲の水田が入る。郡内には湧水が多くあるほか、東から流れ込む小川が合流しチアンジュール川となって西側に流れ出ている。また本郡の一集落あたりの平均人口は三四〇人でチアンジュール-レヘント統治地域中第一位であり、二位の郡の二〇五人を大きく引き離していた。

集落名をみると、水田や灌漑に関する名称がない一方で、宗教、商工業、コーヒーにかかわる名称は一二にのぼる。すなわち「墓（Pasarean）」（番号一、人口二二二人）、「コーヒーの間（Selakopij）」（番号二、人口一五六人）、「モスクのある集落（Kaoem masgig原文のまま）」（番号三、人口三一〇人）、「北にあるイスラム関係者の集落（Kaum Kaler）」（番号四、九六九人、所在不明）、「牛舎（Kandang Sapi）」（番号六、人口二〇〇人、所在不明）、「北の小屋（Kandang Kaler）」（番号七、人口一四四人、所在不明）、「北の市場（Pasar Kaler）」（番号一三、人口四二九人、所在不明）、「南の市場（Pasar Kidoel）」（番号一六、人口三九七人、所在不明）、「鍛冶屋（Sayang）」（番号一九、人口五一七人）、「鍛冶に使う道具（Pangasahan）」（番号二〇、人口四一四人、所在不明）、「レヘントの馬の飼育場所（Bantjeij）」（番号二一、人口二八二人）、「レヘントの住居のある小集落（Djero Djogro）」（番号二四、人口四五七人）である。このうち所在が明確な、番号一～三の集落はチアンジュール市街地の東北にある一方で、番号一九、二一、二四の集落は市街地の南にある。そこでチアンジュール首邑は、西にモスクがあり、レヘント住居の北に市場とコーヒー集荷・輸送拠点、レヘント住

居の南に市場と鍛冶等に関わる職人の集落があったと考えられる。これは当時のプリアンガン地方に特徴的な首邑の建物配置に合致するものである（Wilde 1830：38）。

しかし以上のような首邑機能の存在は、この郡の水田開拓が進んでいないことを意味しない。一九世紀初めのオランダ人の旅行記によればチアンジュール首邑は水田で囲まれていた（Wilde 1830：31）。郡内は取水も比較的容易であったようである。既に述べた湧水・小川のほかに、集落名にも沼を意味するものが三存在した。さらに本郡の水田開拓はかなり早期から開始されていたと言える。すでに一八世紀初めに、首邑チアンジュールの周囲は広範囲に森が切り払われていたこと、および首邑チアンジュールからチブルム郡境にかけての一帯では、いくつかの堰によって分水が行われていたことをオランダ人が報告している（Haan 1910-12：Vol. 2 304）。また本郡は他郡に比べて面積狭小、人口稠密でありながら、概況で述べたように米穀貢納者の総生産量は二五郡中二位、またこれを人口で割った値も五位であった。このことは、本郡が首邑機能を持つとともに、良質の水田地帯であったことを示していよう。

3　チブラゴン

「人口統計」掲載五二集落のうち四三集落の所在が判明した。四三集落が分布する一帯はグデ山本体より東北に伸びる尾根の南側である。この尾根から流れ出る小川・湧水が集まって標高二〇〇ｍ程の集落チブラゴン付近でチブラゴン川となり東流する。集落はこの尾根の中腹と山裾、およびチブラゴン川南岸の用水路ぞいに散在する。五万図ではこの一帯の盆地底部・谷底は一面の水田であり、本稿対象期についても、軍用道路（地図2参照）から眺めた景色についてオランダ人が、よく耕されて豊かな感じで水田とコーヒー園が入り交じっていると述べている（Wilde 1830：31）。また一集落あたりの人口は平均一三三人（八位）である。

以下、「人口統計」掲載集落に付された番号順に開拓状況を検討していく。

(1)　チブラゴン首邑

集落番号一のチブラゴン（人口七三四人）は、チアンジュールからバンドンへむかう交通の要衝として、一八世紀初めからチブラゴン川南岸の台地状の盆地底部に位置していたが、当時付近に水田は存在しなかった（Haan 1910-12：Vol. 2 310）。また集落番号二の「御田（Serang：水田の敬語、スンダ語）」（人口八〇人）はレヘント占有田の存在する集落と考えられるが、所在不明である。

(2)尾根山脚部東北部

集落番号五～一二のうち所在の判明する五集落は、チブラゴン川の北側の山脚部に散在する。山脚部は台地状であるが、集落はいずれも北の尾根より流れ出る小川のそばの比較的灌漑用水の得やすい場所に位置している。ただしチブラゴン北部の尾根はグデ山本体と直結していないため、小川の水源は尾根への降雨のみであり、周年灌漑が可能か否か不明である。

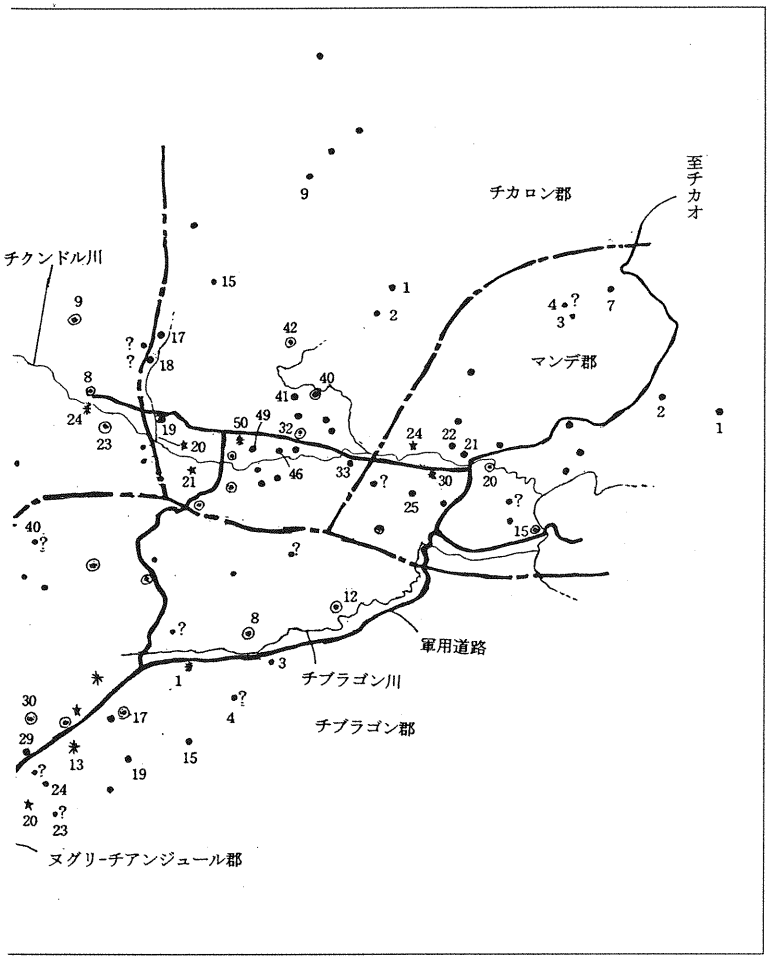
五万図では灌漑工事の跡が若干認められる。集落「堰(Bendoengan：スンダ語)」(番号八、人口一二七人)の北で、小川からの分水が認められ、また「バコム(Bakom：bakon であれば職田を意味するジャワ語)」(番号一二、人口一〇七)へも山脚部から水路が引かれている。チブラゴン郡では、すでに一七八九年以前に当時のレヘントが水田開拓を主導していたこと(Bergsma 1880：Vol. 2 32)、そしてスンダ語で灌漑施設を意味する集落名は本郡ではこの「堰」のみであることから、この一帯の本格的開拓の開始期は一八世紀後半である可能性が高い。またこのことを考慮すると集落番号二の「御田」もこの一帯に存在した可能性がある。

この一帯の集落規模は一〇〇人台が三集落あるのみでその他は一〇〇人以下とさほど大きくなく、所在不明集落も三存在するものの、労役可能男子が戸数より少ない集落はなく、さらに一〇〇人を超える集落のうち二つで労役可能男子に対して労役可能女子の比率が高い。これらの特徴はこの一帯が開拓されたばかりではないこと、および水田耕作が十分には安定していなかったことを示す。なお「バコム」は、この一帯で唯一労役可能女子より労役可能男子が多い集落であるが、この集落の位置が本郡東端に飛び離れており、一九世紀に入って設置されてゆく、郡の端で防衛・監視の機能をもつ集落の可能性があること、さらにその名称が、一九世紀初めにオランダ植民地権力が奨励した職田開拓と関係が考えられることから、この集落の開拓は一九世紀に入ってからの可能性がある。

以上、この一帯は水量の乏しい水源が複数存在する台地で、さほど規模の大きくない灌漑工事で小さな土地が灌漑された。灌漑工事については、レヘントによって開始されたが、工事は一九世紀に入っても続くと考えることが現在の時点では最も合理的である。

(3)盆地底部東部

集落番号三、四および一三～一九は、チブラゴン川南岸の台地状の盆地底部のうち北東の三分の二の部分(標高三四〇m～二六〇m)に分布する。五万図では一面の水田で水路がいくつも走る。この用水路ぞいの集落規模は、最上

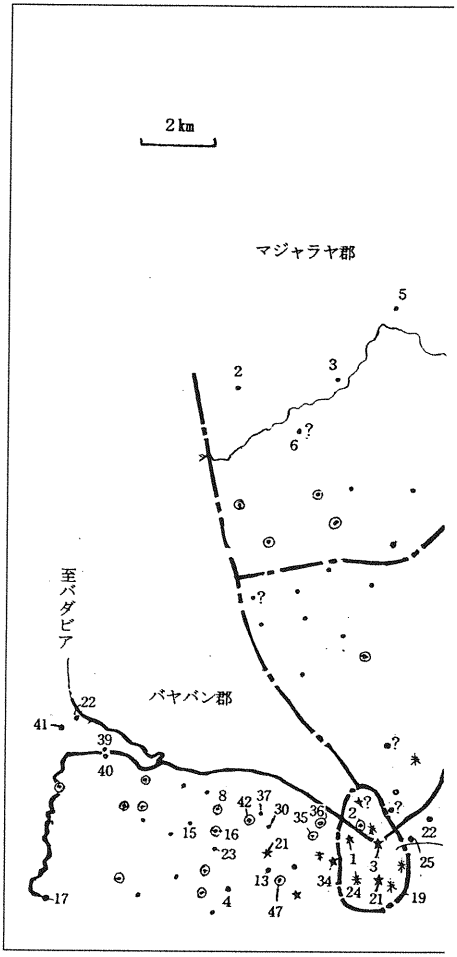


凡例

- ・ 人口 99 人までの集落
- ◎ 人口 100 ～ 199 人の集落
- ★ 人口 200 ～ 299 人の集落
- ＊ 人口 300 人以上の集落
- ？ 集落名の一部が異なる、または集落番号から判断して位置がやや不自然な集落
- ━━━ 道路
- ━・━・━ 郡境（推定）

流集落「マルティ（Marti：ハンマーの意か）」（番号一三）が三四八人と集落チブラゴンに次ぐ規模であるほかは、一〇〇人台が一のみで八集落の平均人口は七二人と小さく、中核-衛星型の集落配置となっている。労役可能女子より労役可能男子が多い集落は二、所在不明集落は一、労役可能男子が戸数より少ない集落も一存在する。さらに労役可能男子にたいして労役可能女子が多すぎる集落はなく、一九世紀に入ってから急速な開拓が行われたと推測される。

集落名をみると、「スカサラナ（Soekasarana：好む＋媒体【マレー語】）」（番号一五、人口八六）、「スカナガラ（Soekanagara：好む＋町）」（番号一七、人口一〇七人）、「スカマントリ（Soekamantri：好む＋役人）」（番号一九、人口八五人）とsoekaの付く名が三ある。プリアンガン地方ではこの言葉は、支配層が建設・居住する集落にしばしばつけられた。またダーンデルス統治期（一八〇八～一一年）にこの一帯を通過する軍用道路が建設されたが、一八〇八年には集落チブラゴンがこの一帯の宿駅であったのに対し（Chijs 1885-1900：Vol.15 819）、一八一七年発行のラッフルズ著『ジャワ誌』の地図では軍用道路の通過集落としてチブラゴンではなく「スカマントリ」が掲載されていた。さ



地図２．ヌグリ-チアンジュール周辺

らにグデ山南麓では、同名集落「スカマントリ」のある一帯は一九世紀に入ってから植民地勢力によって開拓されたと考えられる。そこでこの一帯の本格的開拓は一九世紀に入ってから、それも一八一〇年代初めの可能性が極めて高い。

くわえてこの一帯には灌漑施設を集落名とする「導水パイプの水（Tjitalang）」（番号四、人口四七人）が、東西に走る用水路を南北に結ぶ水路の合流点付近の丘に存在した。この南北の水路は集落チブラゴン付近から盆地中央に伸びており、盆地底部中央への導水を目的としていたと考えられる。しかし十分には機能していなかったようである。集落チブラゴンより東の盆地底部に集落はほとんど無いが、五万図によればこの一帯はチブラゴン川の川底が深くなり、同川からの導水が困難なことが窺える。その一方で、この南北水路を利用する集落として所在が確認できるのは「導水パイプの水」のみであり、仮に集落番号が比較的近い所在不明集落が全てこの水路を利用していたとしても一～二集落増える程度である。さらに「導水パイプの水」は、人口四七人の小規模な集落であったが、本郡唯一の労役可能男子数より戸数が多い集落であり、労役の荷重あるいは自給農業の破綻で生活が不安定な状況にあったと考えられる。

以上の盆地底部の本格的開拓は、集落名、集落規模および配置から判断するならば一九世紀に入ってからオランダ政庁の指揮下に行われたと考えることが妥当であろう。ダーンデルスは水田開拓のための大規模灌漑工事の遂行に熱心であったので、軍用道路維持のために開拓を指導したとも考えられる。

(4)盆地底部西部

集落番号二〇～二五の集落は、(3)の一帯より上流の盆地底部南西部に分布する。「吹き上げる水（Tjiboerial）」（番号二〇）の人口が二〇七人であるのに対して、他の四集落はみな人口一〇〇人以下であり、中核-衛星型を示している。また労役可能男子が労役可能女子より多い集落は二存在し、労役可能男子より戸数が少ない集落はない。労役可能女子が高比率の集落もない。集落名をみると「サバンダル（Sabandar、外国人集団の長の意か?）」[2]（番号二三、人口五〇人）、「サデワタ（Sadewata：神に関係するか?）」（番号二二、人口五七人）、「グンテン（Goenteng：瓦あるいははさみの意か）」（番号二四、人口三七人）、「（Moeka：顔または開く）」（番号二五、人口七三人）など現段階では正確な意味は不明であるものの、宗教や商工業にかかわる名称であると推測されるものが多い。なおマレベル郡にも二箇所、「サバンダル」と「サデワタ」という同名の二集落が近隣に存在する地区があるが、同郡はほぼ全域が一九世紀に入ってから開拓さ

れたと言える。

以上検討した諸特徴から、この一帯の本格的開発は一八世紀終わりか一九世紀初めと推測される。ただし(3)盆地底部東部よりヌグリーチアンジュール郡に近くかつ上流であるので、開拓もより早かったと考えられる。

(5)尾根山脚部西部

集落番号二六～三三の集落は、北の尾根の山脚部のうちチブラゴンより西に分布し、いずれも尾根からの水とグデ山麓に端を発する小川が利用できる位置にある。本郡には人口一〇〇人を越す集落が一三あるが、そのうち五がこの一帯に存在し最も密集しているといえる。集落規模は、三〇〇人台が二、二〇〇人台が一、一〇〇人台が二とばらつきがある。また所在不明集落が一あるものの、すべて労役可能男子より労役可能女子が多く、戸数より労役可能男子が少ない集落もない。集落名をみると動植物自然地形名のほかに「コーヒー(Kopi)」(番号二八、人口二三人、所在不明)、「分かれ道(Sindanglaka)」(番号二九、人口九六人)、「シンクップ(Singkoep：シャベルあるいは開くの意)」(番号三〇、人口一二二人)と輸送や開拓に関連する名称が認められる。この一帯は一八世紀初めよりチアンジュールおよびチブラゴンのレヘント居住集落を結ぶ道路沿いに位置し、かつ開拓に容易な地形であったので、おそらく小規模な開拓が徐々に積み重ねられて比較的早期に既に水田地帯となり、人口も多かったと考えられる。なおこの地区では、古い水田地帯の特徴の一つである、労役可能男子に対する労役可能女子の高比率は認められないが、この地区が幹線道路沿いであるため労役可能男子が集中しているためと考えられる。

(6)尾根中腹

集落番号三四、三五の集落は所在不明であるが、集落番号三六から五二までの集落は、北の尾根の中腹に点在する。標高は四〇〇mから八〇〇mである。五万図でも水田はほとんど認められない。集落規模は一〇〇人台が二あるほかは皆一〇〇人以下であり、小規模な中心-衛星型配置が二つ確認できる。労役可能男子が労役可能女子より多い集落が五存在する一方で、労役可能女子が高率である集落はない。また労役可能男子数が戸数より少ない集落はなく、所在不明集落も集落番号三四、三五を入れても三であり、山中にありながら全体的に集落が安定している印象を受ける。集落名は、動植物自然地形名以外のものが一〇と多いがそのうち四が現在のところ意味不明である。また一九世紀に入ってから登場する集落名「瓦(Genteng)」がひとつ(番号四

〇、人口三〇人）認められる。そこでこの一帯への入植は一九世紀に入ってからの可能性もあるが、何時にせよ、おそらく水田開拓をともなった入植ではないと考えられる。

以上、本郡は、首邑チアンジュールに近い山裾で比較的早期 ― おそらく一八世紀半ばに開拓が開始されたのち、東部の山裾でレヘントによる開拓が実施された。さらに一九世紀に入るとオランダ政庁の主導によって盆地底部開拓が大規模に実施されたが、その目的は軍用道路維持のためではないかと推測される。

4　チカロン

「人口統計」掲載五〇集落のうち三二集落の所在が判明した。三二集落は、チカロン盆地北部山中に一一集落があるほかは、チカロン盆地底部（標高二七〇m、長さ五km、幅二～三km）、それもチクンドル（Tjikoendoel）川北岸の集落チカロンより下流に多く分布している。五万図では盆地底部は一面の水田であり、チクンドル川上流から引かれた水路が縦横に走る。一集落あたりの平均人口は九一人（一一位）である。

(1)北部山腹

集落番号一～一四の集落は盆地北部の標高二五〇～六〇〇mの山中に存在する。五万図では水田は所在判明集落の周囲にわずかに存在するのみである。集落規模は小さく一〇〇人を超えるのは「パラン山（Goenoengparang）」（番号五、人口一〇二人、所在不明）のみであるのに対して、人口五〇人以下の集落は八ある。労役可能女子より労役可能男子の多い集落が三あり、労役可能男子が戸数より少ない集落はないが、所在不明集落は六にのぼり集落の存立基盤はやや不安定であったといえる。労役可能女子が高率な集落は存在しない。集落名は動植物自然地形の名称が大半を占めるが、「馬小屋の水（Tjigedoegan）」（番号九、人口三四人）があり、標高四〇〇mほどのところで馬を飼育していた可能性がある。入植開始期は、集落規模などを考慮すると一八世紀末以降の可能性が高いが、いずれにしても大規模な灌漑工事をともなわない入植であったと言える。

(2)チダダップ（Tjidadap）川流域

集落番号一五～二〇はチカロン盆地の東を流れるチダダップ川（チクンドル川支流）の流域にある。集落「ニャンコロット（Njangkolot：古い＋njang意味不明）」（番号一五、人口四五人）は山腹、「パッシルオライ（Pasir orai：丘＋樹木の一種）」（番号一六、人口三九人）は所在不明集落であるが地区名として残っており、山腹にあることがわかる。「カ

ウンガディン(Kawoengading：砂糖椰子の一種)」(番号一七、人口一〇九人)は支谷底部、「チダダップ(Tjidadap：水＋木の一種)」(番号一八、人口六一人)は所在不明集落であるが支谷底部である可能性が非常に高い。「ソドン(Sodong：うろ)」(番号一九、人口七五人)はチカロン盆地底部にありマジャラヤ郡からチカロン首邑へ伸びるルートとチダダップ川が交わる地点に位置する。五万図では集落「ニャンコロット」および「パッシルオライ」を除いて水田地帯である。この五集落は、小規模で「カウンガディン」の一〇九人が最高である。労役可能女子より労役可能男子が多い集落はなく、戸数より労役可能男子が少ない集落もない。その一方で労役可能女子の比率が高すぎることもなく、集落名称にも開拓の時期を特定する特徴がない。地形から判断するならば、水田開拓は、大規模灌漑工事を伴わずチダダップ川の利用によって行われたと言える。

最後の「上流の水田(Sawa Girang)」(番号二〇、人口二三一人)は盆地底部に位置するが、この集落へはチダダップ川がチクンドル川へ合流する地点の取水口から、五〇〇m程の長さの用水路が引かれている。この「上流の水田」および用水路については本節(5)において、集落チカロン周辺の開拓とあわせて考えたい。

(3)チクンドル川南岸

集落番号二一～三〇は、チクンドル川の南岸に分布する。五万図では南岸の盆地底部も一面の水田である。この一帯の集落規模は比較的大きく、人口二〇〇人台が一、一〇〇台が五あり、そのほかも一集落をのぞいて五〇人以上である。所在不明集落が三あるものの、所在判明集落のほとんどが山脚部でかつ山から小川の流れてくる開拓の容易な場所にある。一〇集落とも労役可能男子より労役可能女子の数が多く、戸数より労役可能男子が少ない集落はない。また労役可能女子の比率が高い集落が四あり、灌漑の容易な土地が時間をかけて徐々に開拓されていった地域の特徴を多く持つ。集落名称をみると、動植物自然地形の名称が大半を占めるなかに、「タリコロット(Talikolot：かつての郡長クラスの居住集落である場合が多い)」(番号二二、人口二九〇人)と「牛舎(Kadangsapi)」(番号二七、人口一六四人、所在不明)が存在するが、前者はヌグリ-チアンジュール郡へ向かう峠の麓に位置した。チカロン-レヘント統治地域は一七世紀半ばから一八世紀初めまで、バタビア-チアンジュール間の交通の要衝であり、このルートを支配するためにはチクンドル川南岸がより重要であったので、「タリコロット」はかつてのレヘント居住集落と考えられる。そこでこの一帯は早い地域では一八世紀初め頃から、遅くとも

一八世紀後半には開拓が始まっていた者と思われる。

(4)チクンドル川北岸東部

集落番号三一～五〇の集落は、「マレベル(Maleber：意味不明)」(番号三三、人口九七人)を除いてチクンドル川北岸の盆地底部に分布するが、そのなかで番号三一～三九は北岸の東部に分布する。五万図ではこの一帯は一面の水田である。集落規模は比較的小さく、一集落（番号三二、人口一〇六人）を除いて皆一〇〇人以下である。その他の集落は最小が五五人であるが固まって存在しており、中心-衛星型配置と考えることもできる。労役可能男子が労役可能女子より多い集落が二存在し、戸数より労役可能男子数が少ない集落はないものの、所在不明集落が三ある。労役可能女子が高率の集落はない。また盆地底部東端の山脚部沿いに川が流れているため、所在判明集落はみな盆地底部の中央よりに存在する。五万図ではこれらの集落へも用水路が流れ込んでいるが、本節(5)で示すように一八二〇年代にこの用水路が存在したかどうかは不明である。集落名は現在のところ意味不明の二を除いてみな動植物自然地形の名称である。以上の特徴はこの一帯が比較的入植が新しい可能性を示し、特に以下に述べる盆地底部東部よりはのちに開拓が始まったものと考えられる。

(5)チクンドル川北岸西部

集落番号四〇～五〇の集落は、灌漑網の発達した北岸西部に位置する。五万図で盆地底部のチクンドル川の川幅は既に二〇ｍ以上あり、開析も進んでいる。このためこの一帯では、本節(2)で述べたチダダップ川の取水口から「上流水田」へ導かれた用水路が、さらに集落チカロン（番号五〇、人口一六〇〇人）へ導水されたのち、上述(4)の一帯および北側の「御田(Serang)」(番号四一、人口九九人)まで達している。五万図で見る限り盆地底部北岸全域がこの取水口の恩恵を受けているといってよい状態である。ただし「御田」は北の山地から盆地底部に流れ込む、灌漑のより容易な川をも用水源としているので、一八二〇年代にチダダップ取水口の恩恵が「御田」まで達していたか否かは不明である。

この一帯の集落規模は比較的大きく、集落チカロンの一六〇〇人を別格として、人口一〇〇人台が五集落あり、その他の集落も五〇人以上である。集落配置はチカロンを中核とした中核-衛星型と見ることが可能である。所在不明集落は四存在するが、このうち幾つかは地図のチカロン市街地にのみ込まれたものと考えられる。労役可能男子数が戸数より少ない集落はなく、労役可能女子より労役可能男子が多い集落は一、労役可能女子が高率の集落はない。

集落名を見ると自然地形動植物名のほかに「御田」「レヘントの馬の飼育人（Bantjeij）」（番号四九、人口八八人）がある。一八五〇年代の調査によればチカロン郡には旧レヘント・貴族の占有田が多く存在した（Bergsma 1876：Vol. 1 BijlageA 6）。郡長・貴族占有田の一部は既に一七八八年以前から存在したので、現地人支配層によって開発がおこなわれた可能性が高い（Haan 1910-12：vol. 3 125）。さらに「Serang」などスンダ語独自の水田や灌漑に関する集落名称は、オランダ植民地権力による大規模灌漑工事開始期以前に命名されていたケースが多いとすれば、チカロン盆地の本格的開拓期は一八世紀半ばから末にかけてであろうと推測される。

以上、本郡は幹線道路の要衝としての重要性を失ったのち支配層主導で盆地底部が開拓され、水田地帯へと変貌したと考えられる。本格的開始期の特定は現在のところ不可能であるが、オランダ植民地権力が本郡の水田開拓に積極的に介入した痕跡は認められない。

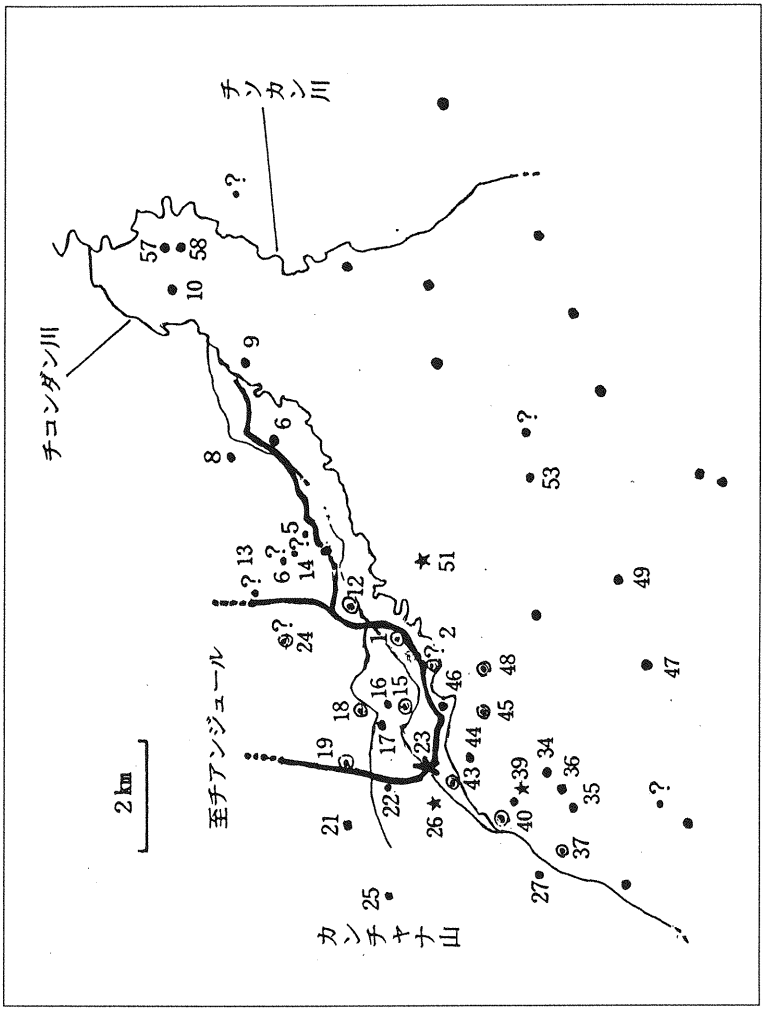
5　チコンダン

「人口統計」掲載七六集落のうち五二集落の所在が判明した。五二集落はチコンダン（Tjikondang）川峡谷底部のほか、同川にそった盆地底部の道路沿い、チソカン（Tjisokang）川沿いの山中に分布する。本郡の集落規模は平均七四人（一六位）と、上述三郡と比較すると際だって低い。

(1)チアンジュール盆地底部東部

集落番号一～一四の集落は、チアンジュール盆地底部を流れるチコンダン川にそって東南に走る道路沿いに点在する（地図3参照）。盆地底部には低い丘が多いものの、平坦部は五万図ではみな水田である。また道路にそって一本の用水路が六km以上にわたって認められるが、所在判明集落一一のうち五がこの用水路沿いにある。この一帯の集落規模はさほど大きくなく、一〇〇人台が三存在するものの、残りの一一のうち七が五〇人以下である。この一帯で戸数より労役可能男子が少ない集落は二、労役可能女子より労役可能男子が多い集落が一存在する。その一方で一〇〇人台の集落のうち二が労役可能男子に対して労役可能女子の比率が極めて高かった。

集落名をみると、「古い宿泊所（Pasangrahan kolot）」（番号一、人口一一七）、「女奴隷の丘（Pasir djalia）」（番号三、人口八四人、所在不明）、「堰新村」（番号四、人口三八、所在不明）、「村警の丘（Pasir malang）」（番号五、人口四一人）、「塔（toegoe）」（番号八、人口二五人）、「水牛の丘（Pasirmoending）」（番号一二、人口一一二人）、「集荷地



地図3．チコンダン郡

凡例

- ・　人口 99 人までの集落
- ◎　人口 100 ～ 199 人の集落
- ★　人口 200 ～ 299 人の集落
- ＊　人口 300 人以上の集落
- ？　集落名の一部が異なる、または集落番号から判断して位置がやや不自然な集落
- ━━━　道路

(Pangkalan)」(番号一四、人口五四人)と、交通・輸送および現地人支配層と関わりのある名称を持つ集落が多い。なお「堰新村」という名称は、大規模灌漑工事の周辺に認められる集落名称で、それらの工事は一九世紀初めにオランダ植民地勢力が主導したと考えられる(大橋　一九九八、七七-七八)。所在不明のその位置を集落番号から推測すると、集落「古い宿泊所」付近の東南方面と考えられる。

以上この一帯は、集落名からみると、南隣のチケトク(Tjiketoeg)郡と同様に(大橋　一九九八、八四-八五)、本郡の統治の中心として植民地権力主導の灌漑施設建設と共に開拓が本格化したと判断される。しかし上述の人口に関する諸特徴からは、灌漑施設の恩恵による経済基盤の安定より、交通・輸送の拠点としての労役などの負担の厳しさが勝っていた集落のあったことがうかがわれる。

(2)チアンジュール盆地底部西部

集落番号一五～二六の集落は、集落「危険な溜池(Tambak baya)」[3](番号二五、人口五五人)を除いてカンチャナ(Kantjana)山の西側の盆地底部に分布する。五万図では底部は平坦で一面の水田である。しかしグデ山本体に端を発する小川はカンチャナ山に遮られてこの一帯には流入していないため、水源に乏しい。このため用水路が複雑に連結しており、本節(1)の長い用水路もこれらの一部が東流したものである。集落規模は比較的大きく人口二〇〇人台が二、一〇〇人台が四存在する。所在不明集落は二である。労役可能女子より労役可能男子が多いのは集落「危険な溜池」のみであり、そのほかは労役可能男子に対する労役可能女子の比率が全般的に高めである。その一方で労役可能男子が戸数より少ない集落が一存在する。集落名は自然地形動植物名以外のものは、「乾いて不毛な土地(Nagrak)」(番号二六、人口二三四人)と「危険な溜池」のみである。

集落番号一五～一八の集落は盆地底部中央にあり、集落名に皆「チサラク(Tjisalak:水+果樹)」を冠す。集落規模は順に一二〇、八四、六九、一三四人である。これに対して集落番号一九以降の所在判明集落では、カンチャナ山脚部に四集落、谷地に「タンキル(Tangkil:果樹)」(番号二一、人口三九人)、そして盆地底部を潤す主な小川の流れるカンチャナ山東のスロープ上に「危険な溜池」がある。山脚部の四集落はいずれも小川が用水として利用できる位置に存在し、人口は一六一、三八、二五〇、二三四人である。このうち人口三八人の「チペティル(Tjipetir:水+樹木)」(番号二二)はこの一帯で唯一戸数より労役可能男子が少なく、労役可能女子が男子の二倍以上であり、また「危険な溜池(Tambak baya)」の下流にあった。タンバック

(tambak) とはダムを作って造成する溜池を意味し、五万図では溜池は認められないものの造成可能な地形である。ただしこの小川は標高一二三九mのカンチャナ山東側の降雨に頼っているので水量はあまり多くなかったと考えられる。

そこで上述四集落のうち人口一〇〇人以上の集落は比較的灌漑が容易な地域で徐々に開拓されたのに対し、「チペテイル」は、現地人支配層の中規模の灌漑工事がなされたものの耕作は安定しなかったと考えられる。しかしその一方でこの灌漑施設に対する植民地権力の期待も読みとれる。すなわち「危険な溜池」集落は、この一帯で唯一労役可能女子より労役可能男子が多く、また隣接するペッセール郡にも同名の集落（労役可能男子一八人に労役可能女子一九人）があり、集落番号から推測すると、本郡の「危険な溜池」の付近にあった。また五万図では、この一帯の水路網に繋がっている水源としていまひとつチコンダン川峡谷なかほどの取水口から伸びる用水路があるが、「人口統計」掲載集落中では「チベベル（Tjibeber：川の中で流れの無いところ）」（番号二三、人口二五〇人）、「ハンジャワル（Handjawar：椰子の一種）」（番号四三、人口一八六人）がこの用水路沿いにあり、この用水路が一八二〇年代に存在した可能性が高い。そこで現時点では、支配層主導で建設された溜池が、植民地権力が盆地底部の灌漑を安定させるためにさらに改良された可能性を指摘しておきたい。

(3)チコンダン川峡谷深部

集落番号二七～三三の集落は、チコンダン川峡谷の奥山山中に分布していると推測される。五万図では一面の森であり、集落「ボラン（Bolang、植物の名）」（番号二七、人口五八人）の周囲以外に水田は認められない。集落規模は小さく最大で六七人である。所在不明集落は三、労役可能女子より労役可能男子の多い集落は二で、労役可能女子の比率は概して低めである。また戸数より労役可能男子が少ない集落はない。集落名は動植物自然地形名のみであり、「ボラン」以外の集落は沼、湖、水を意味する語を含む。各集落の周辺に小規模な水田が存在した可能性あるが、水田耕作が卓越した一帯ではないと言える。

(4)チコンダン峡谷底部

集落番号三四～四〇の集落は、チコンダン峡谷底部のチコンダン川東岸に分布する。五万図では底部は一面の水田であるが水路はわずかである。集落規模は比較的大きく二〇〇人台一、一〇〇人台二、最小の集落が四四人である。所在不明集落はなく、戸数より労役可能男子が少ない集落

もない。人口一〇〇人以上の集落は底部中央に位置し労役可能男子に対する労役可能女子の比率がかなり高い。これに対して一〇〇人以下の集落は三つとも峡谷底部へ小川が流れ出る地点からやや底部中央よりに位置し、労役可能女子の比率は低めで、労役可能男子の方が多い集落が二ある。東側の山脚部で小川の流れ出る一帯に集落がないことは現時点では次のように解釈しておきたい。すなわち一般にプリアンガン地方では山の西側は水源に乏しく水田開拓が困難である。

集落名をみると、現地人支配層との関わり示すものとして「灌漑水路（Susukan：スンダ語、ジャワ語共通）」（番号三九、人口二二七人）、「パニャンドウンガン（Panjandoengan：馬の疾駆）」（番号三七、人口一七八人）が挙げられる。集落「灌漑用水路」へは東方の山地から小川が流れ込んでいるが、山地は山頂が皆標高一〇〇〇m以下と低く、周年灌漑が可能かどうかは不明である。

以上この一帯は、用水が不足した一帯であったが灌漑施設建設によって開拓が本格化したと考えられる。工事の主導者、開拓年代を確定する決め手はないが、工事の規模と集落名称から考えると、植民地権力が灌漑を主導する以前に現地人支配層によって行われた可能性が高い。

なお「ボジョンマンガ（Bodjong manga）」（番号四一、人口六三人）、「リンクンハウール（Linkoenghaur：結婚の風習＋竹）」（番号四二、人口一四二人）は、所在不明であるが、四三番の集落が峡谷の入り口にあるので、この一帯にあった可能性が高い。

(5)チコンダン峡谷入り口の山脚部

集落番号四三～五一の集落は、峡谷出口から東の山脚部および山中に分布する。五万図では所在判明集落八のうち二は山中にあるが、残りの六集落の周囲には水田が広がる。集落規模は比較的大きく、一〇〇人台が四、一〇〇人以下の集落も三〇人台が二（山中一、所在不明一）あるもののそのほかは最小が七三人である。このうち人口一〇〇人以上の集落は、小川の水が利用できる山脚部に三、用水路上に一ある。労役可能女子より労役可能男子の多い集落はないが、労役可能女子の比率は概して低めである。また戸数より労役可能男子の少ない集落が一存在する一方で、戸数に対して労役可能男子の比率が高い集落が二あるが、これらはみな一〇〇人以上の集落で見られる。なお集落名はすべて自然地形動植物名であった。

以上のこの一帯の地形・集落規模の特徴は、まず山脚部の灌漑の容易な地点が徐々に開拓され、その後水の少ない道路沿いおよび大規模工事による水路沿いが開拓されたこ

とを窺わせる。その一方で全般的に労役可能男子の比率が高いこと、および人口一〇〇人以上の集落で右のような特徴がみられることは、現在の時点では、この一帯がかつての輸送拠点であったこと、輸送などの労役の負担が重い集落のあったことを示すと考えられる。

(6)南部山中

集落番号五二～七六の集落のうち一四集落の所在が判明したが、これらの一四集落は集落「チプタット(Tjipoetat：水＋樹木の一種)」(番号五七、人口三二人)、「警備小屋(Padjagan)」(番号五八、人口四八人)が盆地底部の東端に位置する以外は、すべて南部の山中にあった。五万図では山中は一面の森であり水田はほとんど存在しない。この一帯の集落規模は小さく最大で人口五四人で、焼き畑が卓越したインド洋側の諸郡でも周辺部の人口分布に等しい。労役可能男子が戸数より少ない集落は一であるが、労役可能男子が戸数と同数の集落は一二を数える。人口の数値を見ると末尾が〇の数字はそれほど多くないものの、労役可能男女が同数である集落が八ある。このような戸数と労役可能男女数がの三つの数値が同値である場合が多い傾向は、焼畑地帯に特徴的な傾向であるか、あるいは統計の不備と考えられる。また集落名は自然地形動植物名が大多数であるなかに、「要塞の丘(Pasir benteng)」(番号五三、人口三五人)、「水田集落(Lemboer sawa)」(番号七二、人口四〇人、所在不明)があった。しかし水田耕作はこの一帯では例外的であると考えられる。

以上、本郡は、グデ山に端を発する小川がカンチャナ山に遮られているため、概して灌漑用水が豊富とは言えないが、開拓は、灌漑が比較的容易な峡谷入り口周辺の山脚部からはじまり、ついで峡谷底部および盆地底部西側がおそらく現地人支配層主導の灌漑工事によって開拓された。そして一九世紀に入り盆地底部東部が政庁主導で開拓されたと推測されるが、集落名から判断するならば、交通拠点のひとつとしての開拓された可能性が高い。

6　小結

ヌグリ-チアンジュール、チブラゴン、そしてチカロンの旧レヘント統治地域の中心集落は、もとより交通の要衝でありかつ周辺に水田適地の存在する一帯に位置した。このうちチアンジュールが強大化したのは、オランダ政庁の意図もさることながら、コーヒー生産および水田耕作に適した広い後背地の存在、そしてコーヒー輸送にもまずますの条件をそなえていたという立地の良さが大きな理由となったと考えられる。

中規模以上の灌漑工事については以下の二つのパターンが認められた。チブラゴン、チカロン、チコンダン郡はその立地からグデ山本体の豊富な水源が利用できず、チカロンの一例を除くならば、背後の低い山地からの水源を利用し、大きくても数集落ほどの規模で台地状の土地を灌漑した箇所が多い。いずれも周年灌漑が可能かどうか疑わしい。灌漑・水田に関わる集落の名称はスンダ語、あるいはジャワ語であり、名称は概してバラエティに富んでいる。これらの灌漑の主導者はおそらくレヘントあるいはその配下の支配層であり、工事時期はオランダ植民地権力が灌漑工事を主導する一九世紀初頭以前か、それ以降でも植民地権力の影響のおよばない状態での工事であったと考えられる。これに対して植民地権力が主導したと考えられる工事は、開析の進んだチアンジュール盆地底部へ、長い水路で小川の水を導水するものであり、灌漑・水田に関わる集落名は画一的な側面をもつ。本稿対象地域ではチブラゴン、チコンダン両郡にみられるが、失敗もしくは効果の疑わしい工事も一例ならず存在した。なお植民地権力は、交通・輸送を補強する目的でチブラゴン、チコンダン郡の灌漑工事を主導した可能性が高いが、交通・輸送面におけるチコンダン郡の役割の検討は今後の課題である。

Ⅲ　輸送郡とバヤバン郡

本章で扱う郡は、マジャラヤ、マンドウ、ガンダソリ、チヌサ、そしてバヤバンの五郡である。これらの郡の成立は比較的新しくバヤバン郡は一八〇二年から一八一二年までの間に、マジャラヤ、マンドウ郡は一八一七年頃～一八二八年の間に成立した。またチヌサ、ガンダソリ郡は一八二一年にバンドン-レヘント統治地域よりチアンジュール-レヘント統治地域に編入された。バヤバン郡を除く四郡には共通の特徴が見られる。一八二〇年代末の四郡は植民地権力からコーヒー生産、米穀生産とも期待されることはなかった。コーヒー供出予定量は四〇〇～七〇〇ピコルで、最大でもコーヒー生産を期待される郡の四四%、順位もチアンジュール-レヘント統治地域から辺境五郡を除いた二〇郡中、最下位から四位までを占めていた。また米穀貢納者中の水田耕作者は六〇%以下で最低、米穀貢納負担者の総生産量も最低であった。その一方でこれらの郡はいずれも労役可能女子に対する労役可能男子の比率が比較的高かった。そして他のレヘント統治地域と境界を接し、かつての交通の要衝、あるいは一八二〇年代におけるコーヒー輸送上の重要な拠点を中心とする郡編成となっていた。そこで植民地権力は交通拠点の管理のために一八二〇年代になっ

てこれら四郡を編成したと推測される（大橋　一九九六、六-一一）。

これに対してバヤバン郡は、一八二〇年代末にはコーヒー引渡予定量三五〇〇ピコルと生産拠点として大いに期待され、一九九八年拙稿で検討したチブルム、カリアスタナ、パダカッティ郡と極めてよく似た特徴を有していた。それにもかかわらず本稿で検討される理由は、本郡の位置が本稿の作業によって最終的に特定出来たことによる。以下、上述の順に郡毎の開拓状況を検討する。

1　マジャラヤ

「人口統計」掲載二四集落中一八集落の所在が判明した（地図2）。これらの一八集落はチプートリ盆地とチカロン盆地を結ぶ二つのルートぞいに点在する。本郡の集落規模は平均九二人（一〇位）であるが、人口三七〇人の集落「マジャラヤ（Madjalaja：大きな＋果樹）」（番号二四）を除くならば平均八〇人（一五位相当）となる。また人口一〇〇人を越える八集落のうち、四がチプートリ郡との境界付近、三がマジャラヤ盆地に存在し、ルートの起点と終点に集中すると言える。また本郡の所在判明集落のうち集落番号一～九はチプートリ郡側からマジャラヤへとチクンドル峡谷沿いに点在しており、集落番号一〇以降は南側の尾根を通るルートに点在している。このことは本郡が本稿第二章で検討した諸郡と異なり、ルート支配に重点をおいた郡編成であることを物語ろう。以下、水田開拓状況については、集落番号によらず、マジャラヤ盆地とその他とわけて検討する。

(1)マジャラヤ盆地

郡の中心集落「マジャラヤ」の位置する小さな盆地の底部（底部標高四五〇m長さ二km幅一km）は、五万図では一面の水田である。この底部には「人口統計」掲載集落のうち所在判明集落が五存在する。このうち東部にある集落「マジャラヤ」、「コーヒーの狭間（Selakopij）」（番号二三、人口一六〇人）、「ソドン（sodong：川中のくぼみ）」（番号八、人口一三八人）が人口一〇〇人を越える。前二者は労役可能女子より労役可能男子が多いが、「ソドン」は労役可能女子の方が多く、また本郡で唯一、労役可能男子数が戸数より少ない。五万図によるとチクンドル川はすでに集落マジャラヤ付近で水利灌漑に利用しにくい川となっていたようであり、盆地北岸を灌漑するために、一・五km以上上流より、等高線を横切って水路が引かれている。ただし所在判明集落はいずれもすべてチクンドルにそそぎ込む小川のほとりにあるうえ、「人口統計」掲載集落中で北岸に位置するのは

「ソドン」のみであるので、この水路は一八二〇年代末までに開削されていなかった可能性がある。

(2)チクンドゥル峡谷ルートと南部山地ルート

五万図ではチクンドル川峡谷底部に水田が広がる。所在判明集落五のうち峡谷底部にある集落「スダマヤ(Sedamaija:減る+霊が宿る?)」(集落番号三、人口四八人)、「チクンディ(Tjikendi:水差し+水)」(集落番号五、人口八七人)の周囲には水田が広がる。後者は小川がチクンドゥル川に合流する、灌漑が容易な地点に位置し、前者はチクンドル川から灌漑用水を分水する二つの取水口の間に存在した。ただしこれらの取水口とそれに続く用水路が一八二〇年に存在したか否かは判断の手がかりがない。これに対して峡谷をややはずれた丘の上に集落「沼(Koebang)」(集落番号二、人口六五人)、「チサラク(Tjisalak:水+果樹)」(集落番号六、人口一六人)、「葛にからまれた石(Batoukaroet)」(集落番号九、一五二人)が存在するが五万図では何れの集落の周囲にも水田は存在しなかった。またこのうち「チクンディ」、「チサラク」、「葛にからまれた石」で労役可能女子より労役可能男子のほうが多かった。

一方、本郡南部の山地を通るルート一帯は五万図では森林が多い。この一帯には所在判明集落が九存在するが、集落の周囲に少々水田が存在する程度であり、大規模な灌漑工事の痕跡は認められない。チプートリ側にある人口一〇〇人以上の集落四つは何れも労役可能女子より労役可能男子が多く、また一〇〇人以下の集落のうち二つも労役可能男子の方が多かった。

以上、本郡は、一七世紀末から一八世紀初めにかけてバタビアとチカロン・チアンジュール・チブラゴン-レヘント統治地域を結ぶ交通の要衝であったので、チクンドゥル峡谷の灌漑が容易な地点では水田開拓は早かった可能性がある(大橋　一九九四、七八-七九)。しかし一八世紀半ば以降このルートが使用されなくなると、この一帯は現地人支配層・植民地権力にとってさほど注目すべき場所ではなくなったように思われる。集落の分布形態から判断して一八二〇年代に主に南部山地ルートがチプートリ郡の産物輸送に使用されていたと考えられるが、集落名にも、灌漑施設名をはじめ現地人支配層・植民地権力との関係を示す名称は存在しなかった。さらに「人口統計」中の本郡の統計には、これまで検討してきたチアンジュールレヘント統治地域の他郡と比べて末尾が0となっている数字、および戸数、労役可能男女が同数となっている数字が目立ち、植民地権力が住民の把握に熱心でなかったことが窺われる。

2　マンデ

「人口統計」掲載三〇集落のうち二三集落の所在が判明した。二三集落はマンデ盆地底部（標高二〇〇m長さ五km幅三km）とチタルム（Tjitaroem）川西岸に集中している。本郡の集落規模は平均八一人（一四位）である。労役可能女子にたいする労役可能男子の比率は概して高めであり、郡全体では、前者九四七人に対して後者九一〇人である。

(1)チタルム川西岸

集落番号一～一〇の集落のうち所在が判明した七集落は、グデ山山腹で栽培されたコーヒーをチカオ（Tjikao）へ輸送するルートが通過する、チタルム川西岸に分布する。この一帯は五万図では台地であるが、中央にほぼ東西に川が流れ、平坦な部分は一面水田となっている。大規模な灌漑工事跡は認められない。集落は台地の山脚部および渡し場付近に存在する。集落規模は小さく最も大きい集落でも人口六一人である。労役可能女子より労役可能男子が多い集落は三、その一方で労役可能男子数が戸数より少ない集落も二存在した。集落名は動植物自然地形名以外に、「マニス(Manis)」（集落番号七、人口一八人）がある。マニスはジャワ暦五曜の曜日の一つあるいは「甘い」を意味するので、定期市があった可能性がある。

(2)マンデ盆地底部

集落番号一三～三〇のうち所在判明集落は一六であり、集落「マンデ（Mande：ジャワ語で「店」）」（集落番号三〇、人口三〇八人）を中心とする盆地底部に主に分布する。この一帯でヌグリ-チアンジュールからコーヒーを輸送するルートとチプートリ郡からチカロン経由のルートが合流し、またチカオとバンドンへ向かうルートが分岐する。五万図では盆地底部は一面の水田である。マンデ盆地ではチクンドル川の川底が深く、集落マンデ以東の盆地底部を潤す水路は北岸・南岸ともチカロン盆地付近に取水口をもつ。北岸については、道路に平行した水路上に集落「カムラン(Kamoelang：ジャワ語で初めの意か)」（集落番号二四、人口二一八人）、「チクンドゥル(Tjikoendoel：意味不明)」（集落番号二二、人口五二人）、「水に囲まれた建物(Balekambang)」（集落番号二一、人口四一人）がある。また南岸の道路に平行した水路には集落「マンデ」、「レウィコジャ(Lewikodja：沼＋イスラム?)」（集落番号二〇、人口一〇七人）が位置するので、両水路は一八二〇年代にすでに存在した可能性が高い。これに対してこのほかの所在判明集落は南岸・北岸とも交通拠点、あるいは取水の容易な盆地底部山裾に分布し、人口一〇〇人以上の二集落はチタルム川の渡し場と山裾に存在した。この集落分布状況からは、マンデ盆地では

大規模灌漑工事があったものの開拓は未だ底部全域には及んでいなかったと考えられる。なお所在不明の集落番号一一「ノラングル（Norangoel：意味不明）」（人口三二人）、一二「ランコブ（Lankob：祈りの一形態?）」（人口二七人）の集落もマンデ盆地の東側に存在したと考えられる。

この集落番号一一、一二を含むこの一帯では労役可能女子より労役可能男子の多い集落が七存在するが、所在不明二集落を除く五集落は何れも上述の道路付近にあり、「バヤバン（Bijabang、意味不明）」（集落番号一五、人口一四一人）以外はいずれも人口一〇〇人以下の集落であった。また、労役可能男子数が戸数より少ない集落はなく、集落は比較的安定した印象を受ける。

集落名をみると「水に囲まれた建物」、「レウィコジャ」といった宗教に関わる名称、「マンデ」、「牛舎（Kadangsapi）」（集落番号二八、人口七五人、所在不明）、「チプートリ新村（Babakan Tjipoetri：コーヒー輸送のための同郡の出張所の可能性）」（集落番号二五、人口九〇人）：そして交通の難所付近に出現頻度の高い「バヤバン」など輸送・商業に関わる名称が多い一方で、灌漑施設や水田にかかわる名称は存在しなかった。

以上、本郡では盆地中央部で一八二〇年代までに比較的大規模な灌漑工事が行われた可能性がある。開拓の時期と主導者は現時点では不明であるが、灌漑工事が大規模であること、一八一〇年代末からオランダ植民地権力が整備したチカオ経由のコーヒー輸送ルートの拠点であることから、オランダ植民地権力がコーヒー輸送拠点を支えるために主導した可能性が高い。

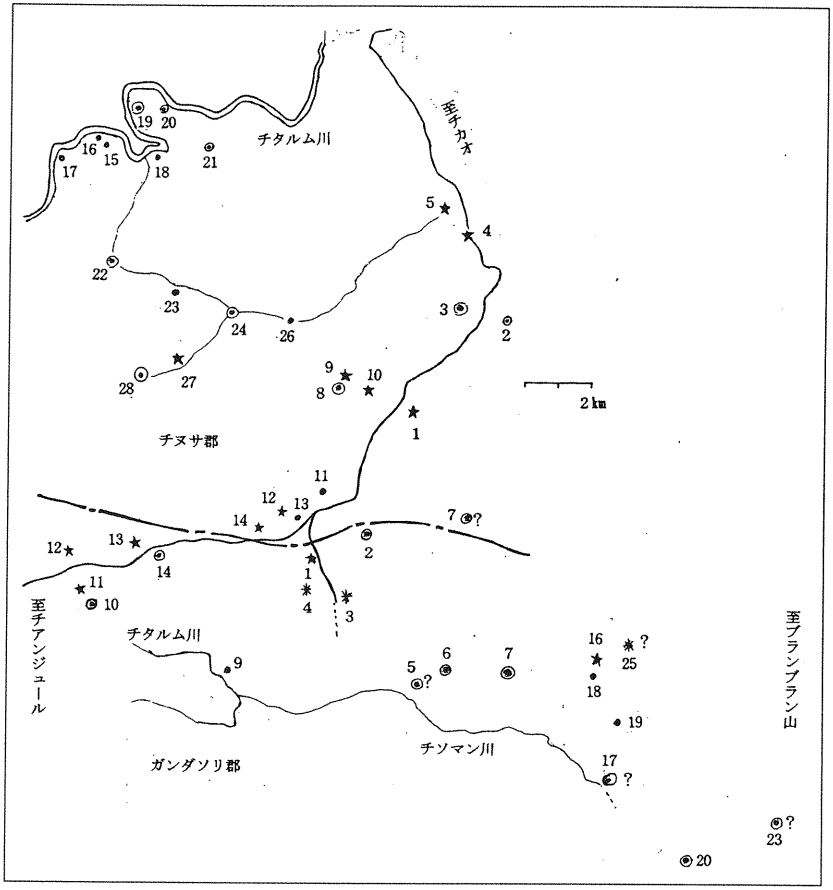
3　ガンダソリ

「人口統計」掲載二七集落のうち二〇集落の所在が判明した。二〇集落は、チタルム川が大きく蛇行する地点の同川北岸より、ブランラン（Boerangrang）山の北西麓までチソマン（Tjisoman）川の北岸に細長く分布する（地図4参照）。一集落あたりの平均人口は二〇五人でヌグリーチアンジュール郡に次いで第二位の規模である。また労役可能女子の比率が高い集落はない。

本郡の開拓状況については一八一一年にバンドンのレヘントが次のように述べている。「ガンダソリ郡もまた食料が欠乏している。水田は少なく、流水がなく、川は開析が進んでいる。乾田や焼畑が耕作され、家畜飼育はといえば、ただ欠乏を補う程度、すなわち必要を満たし米を買うためである。このほかはジャワ糖を採集・加工し、チカオで売る。」（Haan 1910-12：vol. 2 712-713）

本郡は一八二一年九月にバンドンからチアンジュールへ

地図4．ガンダソリ郡・チヌサ郡



凡例

- ・ 人口 99 人までの集落
- ◎ 人口 100 ～ 199 人の集落
- ★ 人口 200 ～ 299 人の集落
- ＊ 人口 300 人以上の集落
- ？ 集落名の一部が異なる、または集落番号から判断して位置がやや不自然な集落
- ━━━ 道路
- ─·─·─ 郡境（推定）

移管されたが、その月より理事官の指示でチヌサ・ガンダソリ郡の水田を灌漑するために、チソマン川に堰を作る工事が開始された。翌月にはレヘントによって、ラデンパンフル（Raden Panghoeloe）の称号を持つレヘント統治地域内最高位のイスラム役人が、米穀増産のための灌漑用水の視察に派遣された。上述の灌漑工事は一八二二年も継続されたが、川が深く難航した。翌年の植民地文書には、工事は完成したものの改良中であることが述べられている（Register 1821年9月14日，1821年10月5日；Algemeen Verslag 1822：25, 1823：13）。おそらく開析が進んでいるために堰が十分な機能を果たさなかったのであろう。なお本工事は一九二〇年代におけるチアンジュール-レヘント統治地域唯一の政庁主導の灌漑工事であった。以下、集落番号順に開拓状況を検討する。

(1)コーヒー輸送路合流点のバンドン側

集落番号一～四の集落は、ヌグリ-チアンジュール郡からチカオに向かう道とバンドン盆地からチカオに向かう道の合流点の、バンドン側の道沿いに位置する。道の東は山地、西側は平野で、平野部は五万図では一面の水田である。大規模な灌漑工事跡は確認できない。集落は何れも山から流れ出る小川のほとりにあり、うち三は取水が容易な山脚部にある。集落名は全て動植物自然地形名であるが、集落規模は大きい。人口は番号順に二六一、一一〇、三七一、三二一人で三〇〇人を超える集落が二ある。また労役可能女子より男子の方が少ない集落は番号一の集落のみであった。以上、この一帯はもとより灌漑が容易な地形であったが、一八世紀末頃よりコーヒー輸送路の拠点として、大規模灌漑工事なしで人口が集中したと考えられる。

(2)チソマン川北岸

集落番号五から九までの五集落は、上述四集落より南のチソマン川北岸に東西に細長く分布する。五万図ではチソマン川の開析の進行によって台地化した一帯であることがわかり、水田はほとんど認められない。所在判明集落四の集落規模は一〇〇人台が三、一〇〇人以下が一で、所在判明集落は皆、労役可能男子が労役可能女子より多くなっている。また六六二人（労役可能男子一九〇人、労役可能女子二〇六人）を擁する「ガンダソリ(Gandasoli: 草の一種)」（番号八、所在不明）もこの一帯の、おそらくコーヒー輸送ルート上にあったと推測される。そして（一）中心集落が不明であるものの郡名を冠す集落を中心とした中核-衛星型の集落配置であること、および（二）五万図ではこの一帯で道路が細かく枝分かれして主要道路がたどれなくなるこ

と、から推測すると、ガンダソリはコーヒー輸送の拠点に建設されたが、一九世紀後半の輸送路の消滅と共に集落も消滅あるいは縮小・改名されたと推測される。さらに五万図ではチソマン川が本郡を通過するのはこの一帯のみであるので、この一帯の西端のチタルム川との合流地点、あるいは東端の谷地で政府主導の灌漑工事が行われた可能性が高い。

(3)コーヒー輸送路合流点チアンジュール側

集落番号一〇～一四の集落は、本郡の西端、チアンジュールへ向かう道沿いにある。五万図では丘陵地帯で水田は一帯の半分ほどの面積を占める。チタルム川へは北側の山から小川が流れ込んでいる。集落規模は、二〇〇人台が三、一〇〇人台が二であり、労役可能女子より労役可能男子の方が多い集落は三である。集落名をみると、植物名が二のほかは「灌漑用導水パイプの水（Tjitalang）」（番号一四、人口一一四）、「村として独立していない集落（Tjantilan）」（番号一二、人口二七二）、「テガルワル（Tegal waroe、木の一種＋野原あるいは畑）」（番号一三、人口二九〇人）である。集落「灌漑用導水パイプ」は北側の山から流れ出る小川の水を導水する灌漑施設を指すと考えられるが、チブラゴン郡の同名集落が一九世紀に入ってからオランダ政庁主導の灌漑工事によって成立した可能性が高いので、この周辺もコーヒー輸送路維持を目的として政庁の主導で開拓された可能性がある。なお集落「チマイ（Tjimaij：意味不明）」（番号一五、人口二〇七人）は所在不明であるが、この一帯に存在したと考えられる。

(4)ブランブラン山麓

集落番号一六～二七の集落は、本郡東部のチソマン川北側の台地とブランブラン山へ至る道沿いに分布する。ブランブラン山の東はタンクバンプラウ山が聳え、その南麓にはバンドン首邑が存在する。五万図では集落の分布地域には森が多く水田はほとんど存在しない。集落規模は三〇〇台が二、二〇〇台が一、一〇〇台が五であり、労役可能女子より労役可能男子が多い集落は四、所在不明集落も四である。この一帯は、集落規模は比較的大きいものの、開拓のためと言うよりはバンドン-レヘント統治地域で生産されたコーヒーを内陸の積出港チカオへ運ぶルートであるために人口が集中したと考えられる。

以上、本郡の開拓をみるとコーヒー輸送路交点付近のバンドン側とチアンジュール側の二山脚部は安定した水田地帯であった可能性が高いが、それ以外の土地は五万図で見る限り開析の大きい台地と山林地帯で水田開拓は望めない

地形である。一八二八年においても米穀貢納負担者中の水田耕作者の率が一六パーセントと低い数値であったのはこのためであろう。にもかかわらず大集落が多いのは、チカオへのコーヒー輸送路の合流点であったためと考えられる。オランダ政庁主導で灌漑工事はこの人口を養う目的で行われたが、失敗したと考えて良かろう。

4　チヌサ

「人口統計」掲載二九集落のうち二六集落の所在が判明した。二六集落はチタルム川がプリアンガン山地を下って平地に出る一帯の東岸に分布する。本郡の一集落あたりの平均人口は一四五人（五位）である。また労役可能女子の比率が高い集落は存在しなかった。

本郡の開拓状況については一八一一年にバンドンのレヘントが次のように述べる。「チヌサ郡もまた水田が少なく、そのため人々が乾田や焼畑で働いていることが原因で食糧が不足している。米のほかに綿花も栽培しているが多くはなく、ただ飢饉に備えるのみである。さらに家畜が飼育されているが交易に十分な程ではなく、ただ飢饉を切り抜ける手段としてのみである。いくつかの用水路があるが、雨季にのみ利用可能であるために、水田がさほどないからである。」(Haan 1910-12 : vol. 2 712-713)

史苑（第六〇巻一号）

本郡もガンダソリ郡同様に、二一年九月からチアンジュールーレヘント統治地域に属す郡となったが、ガンダソリとは異なりオランダ政庁は本郡内では灌漑工事を実施しなかった。ただし開拓の進展については注目していたようで、一八二一年のチアンジュールーレヘント統治地域の統計調査に本郡の人口を記入している。この統計の数値と「人口統計」の数値を比較するならば同郡の人口は倍以上に増加していた（Statisiek 1822, Ligging en Grondbeschrijving）。

(1)チカオ寄りのルートと水田地帯

集落番号一～一〇の集落は、郡都（番号一、人口二〇一人）周辺からチカオに至るルート沿いに分布する。竹林と草地に囲まれた集落「花房の水（Tjidjantoeng）」（番号三、人口一一九人）を除いて集落の周囲にはいずれも水田が広がる。この一帯は小川が多く大規模灌漑工事の痕跡は認められない。「花房の水」と山麓にある集落「パッシルホンジェ（Pasirhondje：草の一種＋丘）」（番号七、人口一六〇人）を除けば、いずれの集落も取水の容易な位置にある。集落規模は比較的大きく、二〇〇人台と一〇〇人台が五づつである。労役可能女子より労役可能男子の方が多い集落が五、労役可能男子が戸数より少ない集落はなく、所在不明集落は一である。集落名はほとんどが自然地形動植物名である

が、オランダ政庁との関わりを示す「マランテンガ（Malangtenga：中心＋村警）」（番号一〇、人口二五一人）、灌漑施設名と考えられる「パラカンリマ（Parakanlima：五＋堰止められ川が広くなった部分）」（番号二、人口一三六人）がある。

以上、この一帯は概して開拓が容易な地形であり、比較的早期から開拓された可能性がある。労役可能男子の集中は、この一帯をコーヒー輸送ルートが通過するためであると考えられる。

(2)コーヒー輸送ルートの合流点付近

集落番号一一～一四の集落は、チアンジュール-チカオ・ルートとバンドン-チカオ・ルートの合流地点の北側に分布する。この一帯は五万図では山裾に広がる低い丘陵地帯であり水田と椰子林が入り混じるが、付近から流れ出た小川が集まる一帯でもあり取水は容易である。大規模工事の痕跡は認められない。集落規模は二極化しており人口二〇〇人台が二、一〇〇人以下が二である。人口一〇〇人以下の一集落をのぞいて労役可能女子より労役可能男子が多い。労役可能男子が戸数より少ない集落、および所在不明集落はない。集落名は自然地形動植物名のほかに、人口の最も少ない集落「ナンゴタック（Nangotak）[5]」（番号一三、人口三九人）が、現在のところ意味不明である。この一帯の開拓時期を特定する決め手はないが、二〇〇人台の集落の存在と労役可能男子の多さはコーヒー輸送ルートの拠点付近に位置しているための人口集中であると考えられる。

(3)チタルム川岸

集落番号一五～二一の集落は、チタルム川が平地に出る直前の東岸の河岸段丘上に分布する。段丘の東側には山地が迫り、チタルム川に短い小川が何本も注ぐ。五万図では段丘上に水田が存在するが、水田付近には小川や用水路は認められない。集落規模は人口一〇〇人台が三あるほかは皆一〇〇人以下である。人口一〇〇以下の集落は皆労役可能女子より労役可能男子が多く、また上流に位置する。所在不明集落および労役可能男子数が戸数より少ない集落はなく、集落は安定した印象を受ける。集落名は自然地形動植物名のほかに、「大きな危険（Pringalaija）」（番号一六、人口五八人）、「パラカンサピ（Parakansapi：牛＋堰止められ川が広くなった部分）[6]」（番号一九、人口一五九人）「喧嘩好きな（Telembel）」（番号二一、人口一九一人）がある。コーヒーを船積みした場所とも考えられるがこの一帯に至るには小さな峠を越えなければならず、チカオで船積みしたほうが合理的である。いずれにしても大規模な水田開発

は認められない。

(4)パラン（Parang）山山腹

集落番号二二～二九の集落は、パラン山の山腹一五〇～六〇〇mに分布する。勾配があるため五万図でも水田は集落の周囲に多少あるかなきかである。集落規模は人口二〇〇人台一、一〇〇人台四、さらに一〇〇人以下の集落も皆五〇人以上と比較的大きい。労役可能女子より労役可能男子の多い集落が二、労役可能男子数が戸数より少ない集落はないが、所在不明集落が二存在する。集落名をみると自然地形動植物名のほかに、「馬小屋の水(Tjikandang)」(番号二八、人口一八七人)、「高位の人が滞在する場所(Palilingan)」(番号二二、人口一四九人)、「立ち寄り所(Panindangan)」(番号二三、人口九八人)、「水牛のいるところ(Pamoendingan)」(番号二五、人口七一人、所在不明)「御爪のあるところ(Panangajan)」(番号二六、人口五四人)がある。本郡で家畜が飼われていることを述べる史料があるので、標高の高い涼しいところで支配層監督下で牛馬が飼育されていたと考えられる。

以上、本郡は小川が多く大規模灌漑を必要としない地形が広がるが、山が低いため一年を通じて水を得ることが難しかったと推測される。一八二〇年代末に至っても集落分布はまばらであり、開拓は着手されたばかりと考えられる。集落規模の大きさと労役可能男子の集中はコーヒー輸送路沿いであるためであろう。

5　バヤバン郡

「人口統計」掲載五〇集落のうち三七集落の所在が判明した。三七集落は、チプートリ郡からグデ山のスロープにそって下る軍用道路の南側、カリアスタナ郡とチブルム郡の間に分布する（地図2参照）。この一帯はグデ山の標高一〇〇〇m以上の山腹から流れ出す小川、および標高八〇〇～七〇〇mからの湧き水に恵まれる。カリアスタナ郡とは水系を別にする。五万図ではこの一帯は一面の水田である一方で、やや起伏があるため灌漑網が複雑に入り組んでいる。一集落あたりの人口は平均一三六人（七位）である。労役可能女子より労役可能男子のほうが多い集落は三三であり、労役可能女子の比率が際だって高い集落は存在しない。

本郡の集落番号は集落分布と関連を持たない一方で、集落分布は標高によって異なった特徴を示すので、以下、開拓状況を標高の低い地区より検討してゆく。

(1)ヌグリ-チアンジュール郡西側

ヌグリ-チアンジュール郡と接する本郡東端は、標高四五

〇～五五〇ｍで用水が豊富であり、集落も規模が大きい。所在判明集落九のうち人口三〇〇人台が一、二〇〇人台が三、一〇〇台が三あり、人口二〇〇人以上の本郡集落はすべてこの一帯にあることになる。労役可能男子が労役可能女子より少ない集落は「不毛の地（Nagrak）」（番号一三、人口六四人）のみである。五万図ではこの一帯は一面の水田であり所在判明集落はすべて小川・湧水の付近に存在する。集落名を見ると自然地形動植物名の他に、既に述べた「不毛の地」、「パヌンバンガン（Panoembangan：トウンバン（ジャワ歌謡）＋場所）」（番号二一、人口二〇七人）、「大田（Sawagede）」（番号三四、人口二〇三人）、「テガルレガ（Tegallega：野原あるいは畑＋広い）」（番号三五、人口一〇〇人）、「ラウェイ（Raweij：たわわに実る）」（番号三六、人口一四三人）、「スディ（Sudi：喜んで～する、または葉の一種、ジャワ語）」（番号四七、人口一四一人）がある。

この一帯は、ヌグリーチアンジュール郡と同様の条件を備えており、早くから開拓が進んだと考えられるが、集落名称からは、かならずしも水田適地のみではなかったことが窺われる。

(2)標高六〇〇ｍ付近

標高六〇〇ｍ付近の北部に三集落が存在する。「チャリンギン（Tjaringin：樹木の一種）」（番号三〇、人口二九人）、「チャドット（Tjadot：意味不明）」（番号三七、人口五六人）、そして「ムンジュル（Moendjoel：盛り上がり）」（番号四二、人口一一九人）である。集落規模は小さいが、三集落とも労役可能男子より労役可能女子がわずかに多い。五万図では付近は一面水田であり、三集落とも水路のそばに位置するが、周囲に比べてやや高くなった地形であることが見て取れ、さらに主要道路からも遠い。開拓が難しい一帯であったと推測される。

(3)標高六五〇ｍ付近

標高六五〇ｍ付近には五集落がほぼ南北に一列にならぶ。このうち四集落が人口一〇〇人台であり、残りの一集落は五四人である。さらにその付近の標高六五〇ｍ～七〇〇ｍのあたりに集落が六、標高六〇〇ｍ付近の南部に二存在する。いずれも人口一〇〇人以下である。労役可能女子より労役可能男子が多い集落は人口一〇〇台で三、一〇〇以下で六存在した。五万図ではここも一面の水田であり、集落はいずれも水路付近に位置する。集落名をみると、自然地形動植物名のほか「中国の沼（Rawatjina）」（番号四、人口六九人）、「ロンケワン（Longkewang：洞穴＋爆発物（中国語））」（番号一六、人口一一二人）、「均衡（Imbangan）」

（番号二三、人口五四人）がある。現在の所意味不明である集落名に「Gasol」（番号八、人口一二三人）、「Panehegan」（番号九、人口四五人）、「Padaroeum kidoel」（番号一五、人口五八人）があるが、後二者も自然地形植物名とは思われない。さらに所在不明であるが「禁忌の竹（Awirarangan）」（集落番号二、人口一八四）もおそらくこの付近に存在したと考えられる。中国人、現地人支配層との関わりを示す集落名が多く、この一帯は彼らとの関わりの中で開拓された可能性がある。

(4)標高七五〇m付近

標高七五〇m付近には集落が五存在する。人口は一〇〇人台が四で、残る一は二三人である。すべて労役可能女子より労役可能男子の方が多い。五万図では傾斜がやや急になるものの未だ一面の水田であり、集落は皆自然の小川のほとりにある。集落名は、意味不明の「Sarampad」を除いてみな自然地形動植物名であった。

(5)標高八〇〇m以上

標高八〇〇mから九〇〇mの一帯には、集落が六存在する。いずれも幹線道路沿いにある。集落規模は人口一〇〇人台が一で、あとはそれ以下である。労役可能女子より労役可能男子が多い集落が三ある一方で、本郡に二のみ存在する戸数より労役可能男子数が少ない集落は二つともこの一帯に存在する。五万図で九〇〇m付近にある三集落はいずれも水田地帯と森林地帯の境界上に位置している。集落名をみると自然地形動植物名が一のほかは、「避難所（Njalindoeng）」（番号二二、人口九一人）、「堰（Kabandoengan）」（番号一七、人口三八人）、「上流の城壁のある集落（Koeta Girang）」（番号三九、人口七一人）、「下流の城壁のある町（Koeta Hilir）」（番号四〇、人口九一人）、「ブランクン（Boerangkeng：意味不明）」（番号四一、人口三九人）である。また五万図では、グデ山腹を南北に走る道路上に、「人口統計」にはみえないものの郡名と同名の集落バヤバンが認められるので、この一帯はコーヒー輸送の幹線道路あるいは郡境の防備のために開拓されたと考えられる。

なお集落「堰」の付近には堰が存在したと考えられるが、地形から判断してこの灌漑施設がバヤバン郡を潤した可能性はない。堰はカリアスタナ郡の集落「堰」の付近にあったと考えられ、カリアスタナ郡の西部およびパダカッティ郡西部を潤したと考えられる。堰に関わるこのような集落配置の型は、ペッセール郡の集落「堰新村」、「危険な溜池」にも見られる（大橋　一九九八、八二）。

以上、判明集落からのみの判断であるが、本郡の開拓は次のように考えられる。まずヌグリ-チアンジュール付近のみに二〇〇人以上の集落があることから、開拓はヌグリ-チアンジュール付近よりグデ山に向かって進展したと考えられる。またカリアスタナ、パダッカティ両郡の集落分布状況と比較して、本郡が小川・湧水も多いが起伏も大きく、当時の技術で灌漑が難しい地点が多かったこと、労役可能男子が多いこと、そして現地人支配層との関わりを示す集落名が多いことから、本郡は比較的遅い時期に短期間に開拓された可能性が高い。さらにバヤバンという郡名は一八一二年に既に見えるものの、T.S.ラッフルズの統治期間中（一八一一-一八一六年）に、チパク(Tjipakoe)郡に統合されていたことがわかる(Haan 1910-12: vol. 3 131; Wilde 1830: 31)。そこで一八二一年までに郡が再分割されたのち、再度び入植が行われた可能性がある(Register 1821年8月9日)。

(6)小結

本章の検討からも、一八世紀末から一八二〇年代のチアンジュール-レヘント統治地域では、水田開拓が必ずしもコーヒー栽培と直結していないことが判明した。コーヒー輸送路および輸送を維持するためのルート沿いの一帯の開拓事例が多数存在したのである。またバヤバン郡は、一九九八年拙稿で検討した山麓のコーヒー郡と比較すると、東麓で最も開拓の難しい地形であり、おそらく開拓が最も新しいコーヒー郡であると考えられる。

おわりに

本論では筆者が近年継続しているホードレイ批判をおこなったが、本稿対象地域においても、ホードレイの封建的生産様式成立説とは異なる事例の存在が明らかとなった。プリアンガン地方における水田開発は、必ずしもコーヒー栽培とのみリンクしていた訳ではない。プリアンガン地方におけるコーヒー生産は、輸送が生産そのものに勝るとも劣らない大事業であり、輸送の諸条件が生産計画をも左右するボトルネックとなった。そして一九世紀初めから一八二〇年代における植民地権力主導の巨大開発のかなりの部分は、このボトルネックの解消を意図したものであった。とすれば、一九世紀末に始まる鉄道の敷設は、プリアンガン地方社会のありかたを再び大きく変えたであろうとの見通しを得ることが出来る。

森氏の学恩を得た筆者は、氏の墓前にさらに次のことを報告せねばならないであろう。これまでの研究から、近世プリアンガンにおけるオランダ植民地支配は、東南アジア

海域の世界市場向け産物に対する、巨大組織の金貸し資本による組み込みの始まりであるとともに、資金・利権の流れに裏打ちされたパトロン-クライアント関係の活用という地方統治メカニズムの始まりとして、スハルト開発独裁体制を視野に収めえると考えるに至ったと。

森氏は、歴史学に洗練を強い挙げ句の果てに学問のための学問にさせるどこからともない力にあらがい、現状批判の姿勢をとりつづけた方であった。個別実証に埋没し眼前のアジア経済危機、インドネシア政治情勢と関わりをもてない歴史研究の現状に、歯がゆい思いを抱かれての御他界であったと思われる。植民地支配・新体制など、忌まわしき過去は、道徳的非難や忘却では過ぎ去りはしない。明瞭なる言語化によってその構造を葬らなければ亡霊が未来にさまよい出て再び民衆を苦しませるであろう。森氏の声が聞こえるようである。さらに歴史学を現在と切り離して過去の復習に封じ込めたうえ、歴史学を含めた人文科学は役に立たないと言わしめるものの正体も突き止めなければならない。森氏が我々に残された課題は多い。

註

(1) （永渕康之　一九九八）など参照。

(2) sabandarはペルシア語のsjahbandarでスンダ語辞書でも港湾長官をさすが、一七世紀のオランダ文書には、外国人居留地の長官をさすものがある。

(3) bayaは、古いマレー語では「新しい」を意味する。

(4) Soedamayaは、チアンジュールレヘント統治地域内ではチケトク（Tjiketog）郡の盆地底部で、一八世紀末以前に開けたと考えられる一帯に同名の集落が認められる。宗教に関わる名称の可能性が高い。

(5) 「馬鹿者にされた」の意味にとれる。

(6) 五万図では堰は認められない。チタルム（Tjitaroem）川が蛇行によって下流より広くなっていることを指すと考えられる。

(7) 蹄ではなく人間の手足の爪の丁寧語が使用されているので、宗教にかかわる名称の可能性もある。

参考文献

未公刊文書
インドネシア国立公文書館所蔵
プリアンガン理事州地方文書
Bevolking van het Regentschap Tjanjor in December 1827
Register der Handelingen en Besluiten van den Resident der Preanger Regentschappen voor 1819-1821.
オランダ国立公文書館所蔵 G.H.CHR.Schneitherコレクション

Statistiek der Preanger Regentshappen over 1822
Algemeen Verslag, Preanger Regentschappen. 1822, 23.

公刊文書・研究文献

Anonymous. 1856. "Hoe't er vroeger in de Bataviasche bovenlanden en de Preangerregentschappen uitzag". Tijdschrift voor Nederlandsch-Indie. 2 : 161-180.
Bergsma, W. B. ed. 1876, 1880, 1896. Eindresume van het onderzoek naar de rechten van den inlander op den grond op Java en Madoera. 3 Vols. Batavia.
Chijs, J. A. van der. ed. 1885-1900. Nederlandsch-Indisch Plakaat-boek. 17vols. Batavia.
Coolsma, S. 1913 Soendaneesh-Hollandsch woordenboek. 2dedruk.Leiden:A.W.Sijthoff'sUitgevers-maatshappij.
Eringa, F. S. 1984. Soendaas-Nederlands Woordenboek. Dordrecht, Cinnaminson:Foris Publications Holland.
Haan,F.de.1910-12 Priangan,De Preanger-regentschappen onder het Nederlandsch bestuur tot 1811. 4vols. Batavia : G. Kolff & Co.
Hoadley, M. C., 1994. Towards a Feudal Mode of Production West Java, 1680-1800, Singapore : Institute of Southeast Asian Studies.
永渕康之、一九九八。『バリ島』(講談社現代新書一三九五)、東京、講談社。
大橋厚子、一九八九。「ジャワ島プリアンガン地方におけるコーヒー労役の強化について — 一八世紀半ばから一九世紀初めまで —」『東方学』七八、一一一-一二六。
一九九四。「ジャワ島プリアンガン地方におけるコーヒー輸送とレヘント」『東南アジア研究』三二-一、六六-一一九。
一九九五。「西ジャワ・プリアンガン地方の下級首長とコーヒー輸送 — 一八二〇年代を中心に —」『アジア経済』三二-一、六六-一一九。
一九九六。「一八二〇年代のプリアンガン理事州の郡編成 — チアンジュールおよびバンドン-レヘント統治地域の統計から —」『南方文化』二三、五五-七八。
一九九七。「プリアンガン地方の水田開拓とオランダ植民地権力 — 一八二〇年代を中心に —」『東南アジア — 歴史と文化 —』二六、一四-三六。
一九九八。「ジャワ島チアンジュール盆地開拓試論 — 一八二〇年代を中心に —」『アジア・アフリカ言語文化研究』五五、七三-九二。
Raffles, T. S. 1988. The History of Java. Singapore : Oxford University Press. reprint.
参謀本部陸地測量部、一九四三。五万分の一図ジャワ島、摂南大学・京都大学東南アジア研究センター所蔵。
Wilde, A. de. 1830. De Preanger Regentschappen op Java gelegen. Amsterdam : M. Westerman.